

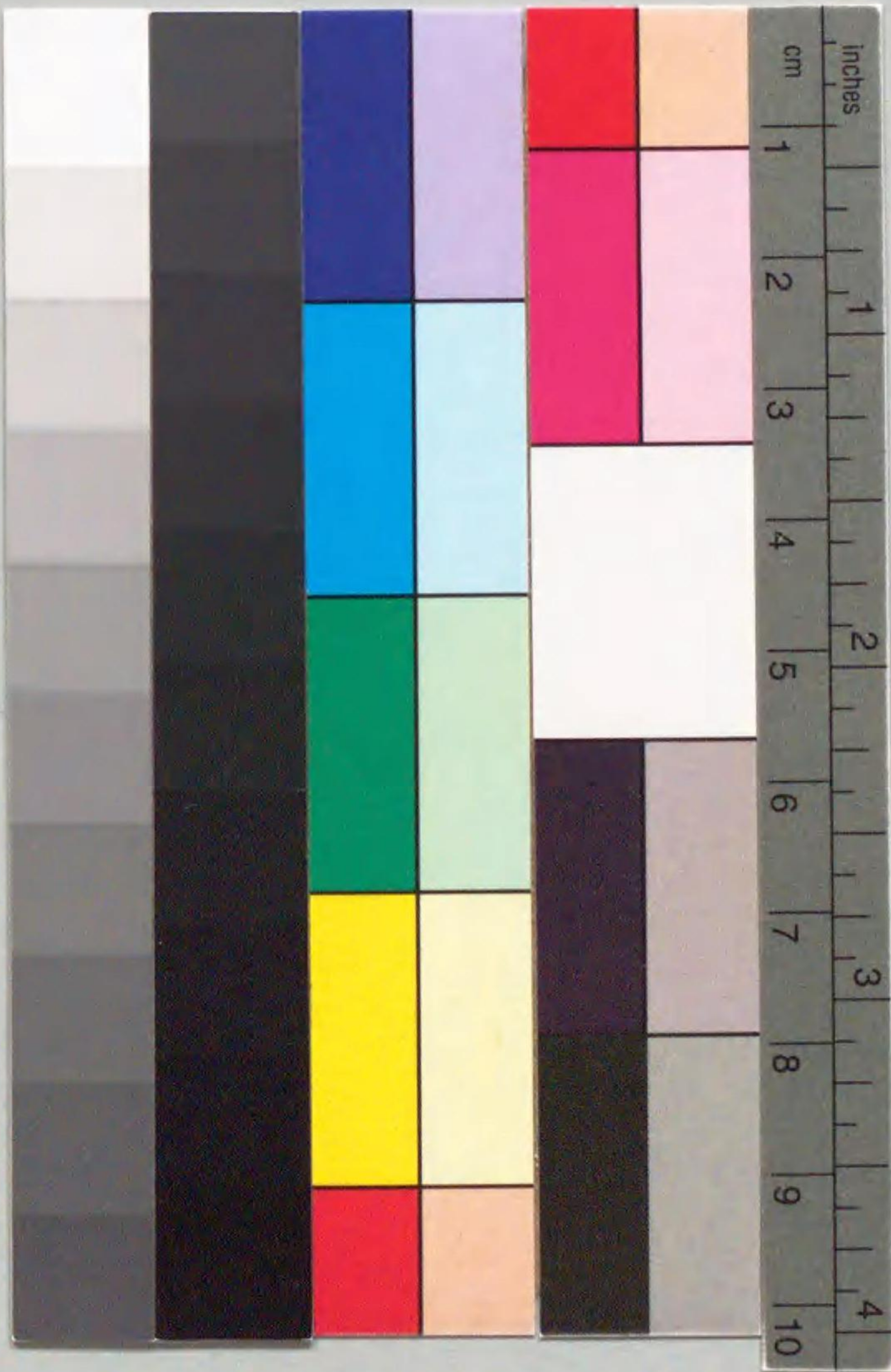
幻燈會

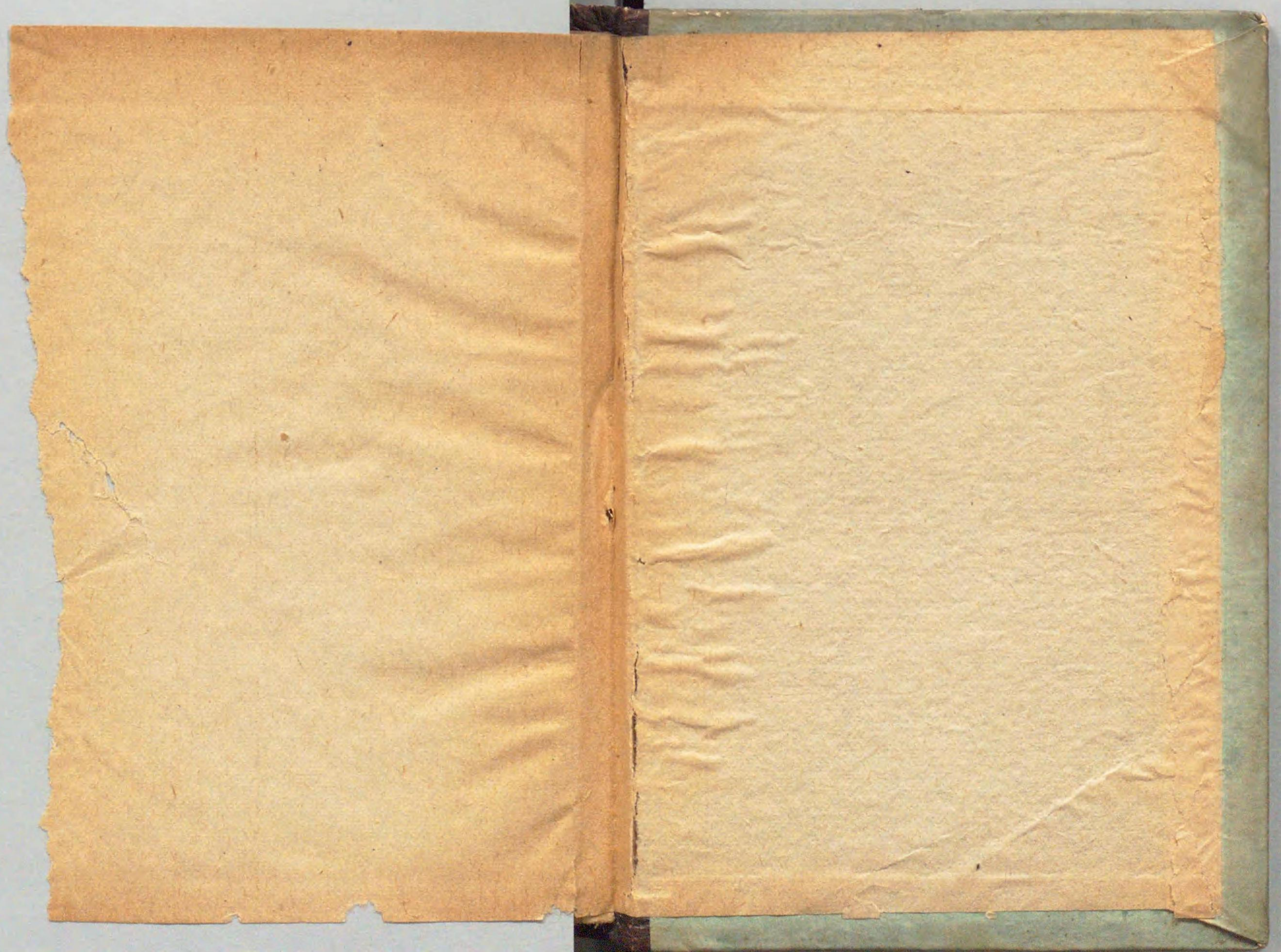
2/53
639

公
主
心
推
乃



特
8





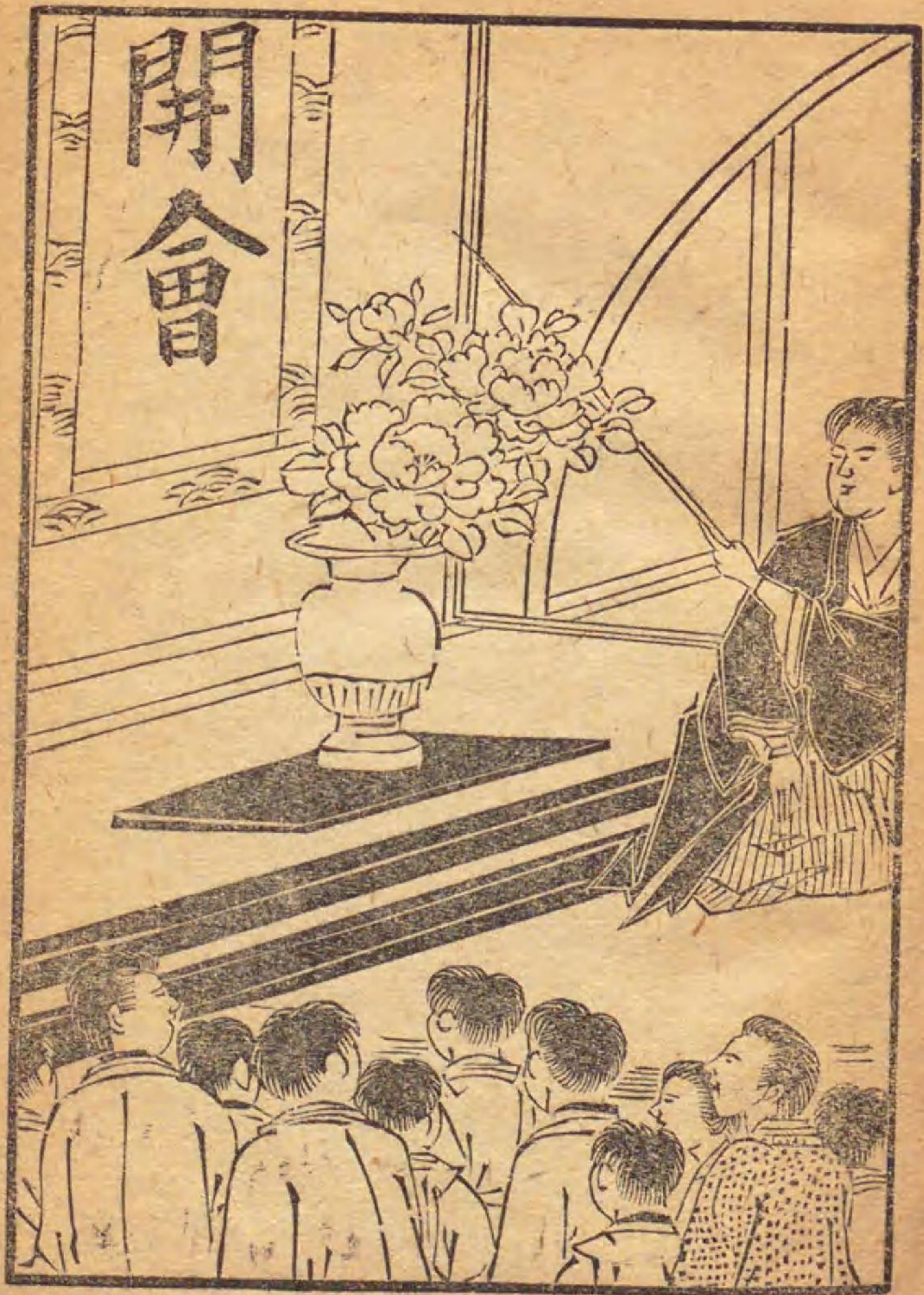


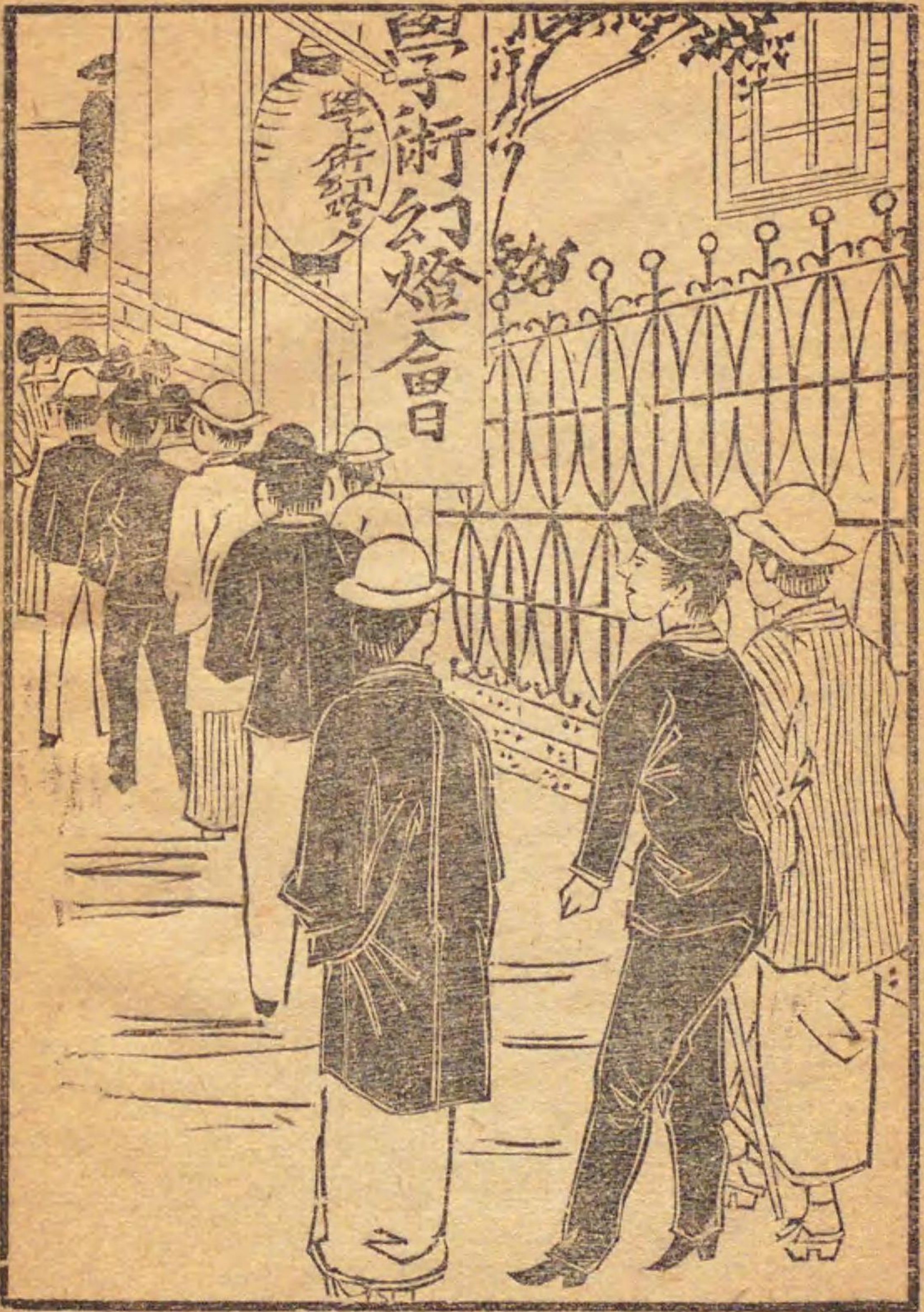
少年必携 學術幻燈會序

世の中よと實事の外の繪ほと見て感じるもの
御坐いません諸君が御讀みある書籍よと挿畫があ
り又修身料よと教訓畫がありすが皆此早速感じ
る爲でありませう併し其畫が人と人だけ獸と獸
の諸器械と諸器械だけ又其れ相當の大さよ描てあ
りません所が幻燈よ其れ相當よ映ッて綺麗で面
白う御坐いませうから御慰みかたう御爲よなるや
うよ御燈よ持し御話致しませう

明治二十三年十一月

著者誌





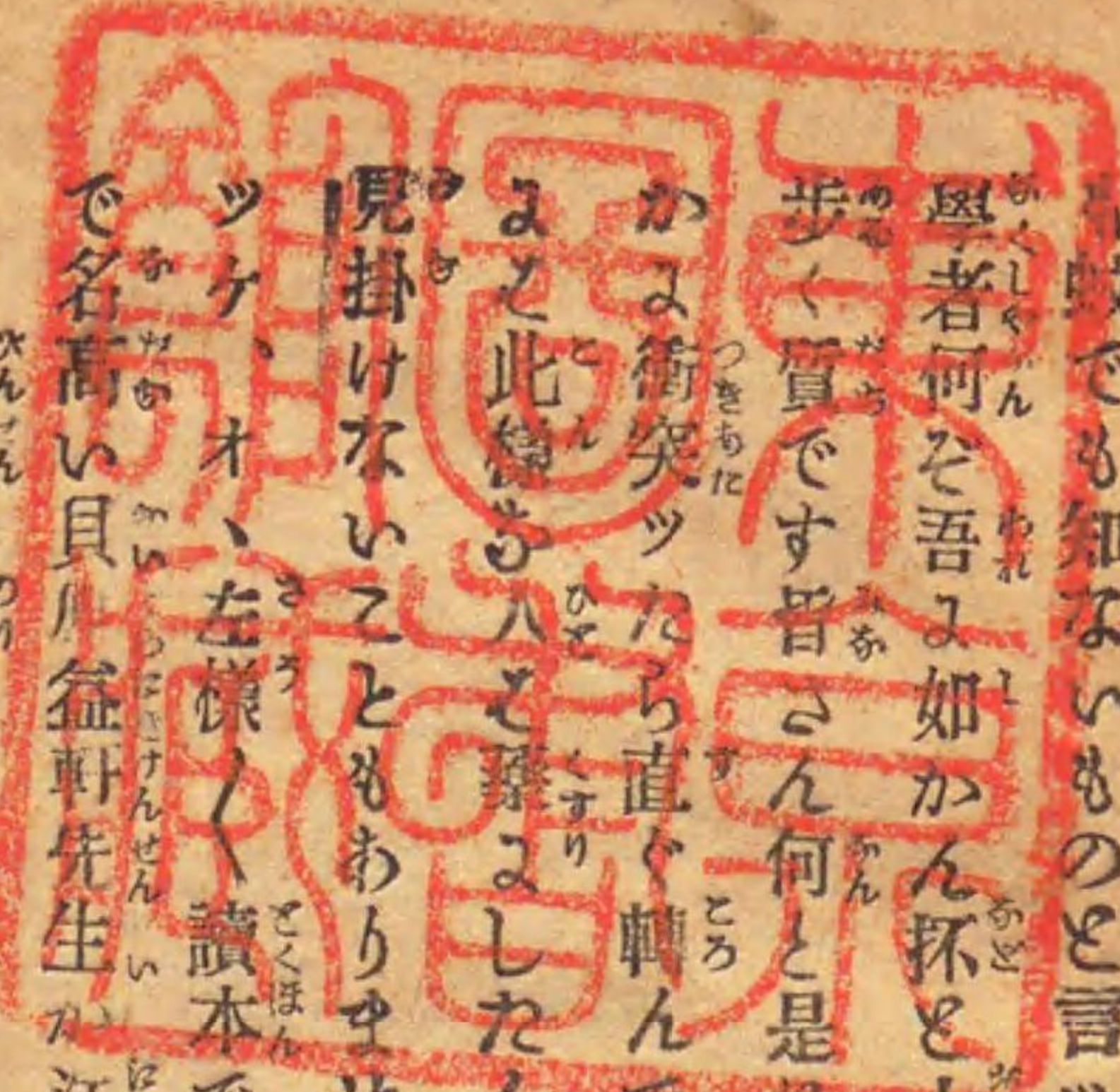
目録

- 自慢と智慧の行當り じまん おお ちき、た
おほたかのみやをりをかしんゆう はかし
- 大塔宮護良親王の話 むかふじま はかし
- 向島の話 はかむねぎのいちまうをく
- 塙保己一盲目よて學問したる話 はかむね ちくもん
- 理化學の話 りくわがく はかし
- 能文なる少年の話 のうぶん せうねん はかし
- 高田屋嘉兵衛氏魯國の少年よ其國語を學ぶ たかた やへゑ しろこく せうねん そのこくご まか
- 塵積れを山を成す ちりつを やま なる
- 實の登る話 みの の はかし
- 神經の話 しんけい はかし
- 智慧と工夫よ在り ちきと くふう あり
- 畫の話 ゑ はかし

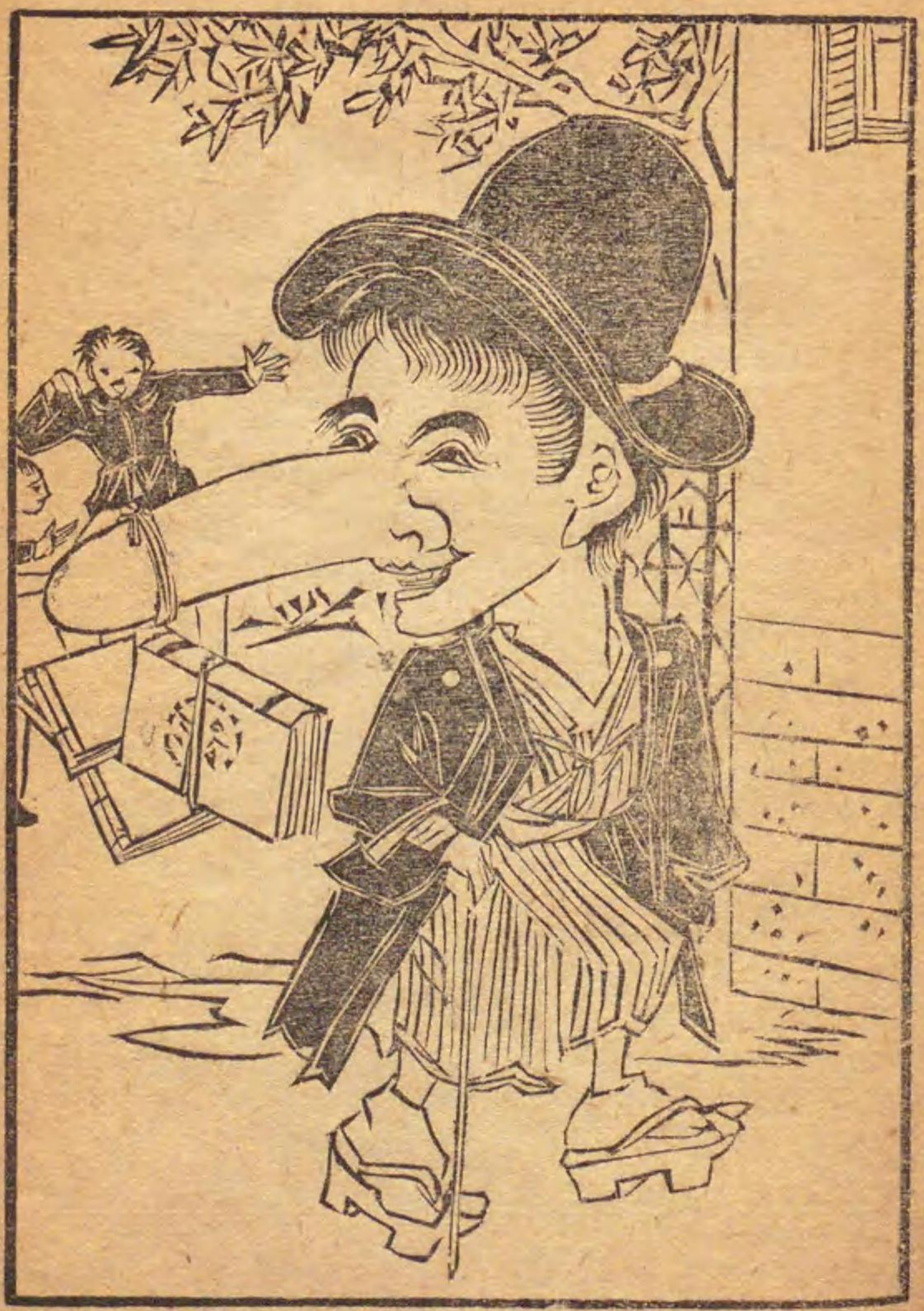
自慢は智慧の行當り

ハア可笑な者が映りました皆さん是れ之何と思召ます頭
が勝て居まして鼻が滅法界も高くて脚が瘡せて細くツて
踵が有るか無いか解りませぬ其癖大きき足駄を穿て居り
ます是れでさへ轉げさうでありますのみおま々鼻も澤
山杏三冊の書籍を縛ツて下垂げてます何と危険いぢやあ
りませぬか此書籍之何でせう見る所が原書が一冊、和本
が二冊、内一冊之馬鹿げた小説であります願ふ此書生さ
んと僅一二冊の書籍を讀んで多分の小説を讀んで涎を流して
居て我ころと新日本の學士である政治でも法律でも何で

敗でも知らないものと言ツチャア、へん恐らくと演し無
學者何ぞ吾も如かん杯と大威張又威張ツて肩で風を切て
歩く質です皆さん何と是れが才子と見えますか今も何
か衝突ツたら直ぐ轉んで目を眩しませう本校の生徒達
よと此繪も八と舞ましたくも有りませぬ私之嘗て何かの書であツた
見掛けないこともありません私之嘗て何かの書であツた
ツケ、オ、左様、讀本で見たとが有りませぬ前か笠笹前
で名高い貝川益軒先生の江戸から國へ歸ります時、大阪
から便船に乗りましたことがあります其時船中も壯い士
が乗合して居まして頻と經學の講釋を爲ました、スルと



のりあひ ちやうにん 乗合よと町人も百姓も居まして何しろ其比のお侍の勢
 といふもの之大したものですから皆分らない乍ら又眠り
 を堪え欠を殺して聴て居ました扱て貝原先生と大小と佩
 て居ますが粗末な風をして隅の方又チンと畏ッて聞て居
 ました其う斯う致す中、日を経て船と着所へ着きまして
 各が姓名を告げて別れる段又ありまして夫の士が此お爺
 さんの貝原先生と先名を問ひますから先生と私と筑前の
 貝原と言掛けますと皆まで聞かず又胡鼠く遁て行ッた
 とありました是れだから皆さん此書生の様又吾身知らず
 の自慢しますと飛んだ目と遇ひますぞへ



塵積れば山を成す

今爰又映りましたの何でありませう風体之學校生徒で
あります是れ之學校歸り水菓子屋へ立寄まして買喰を
致して居る圖であります舊來悪い風が有りまして買ふと
直ぐ其店頭又立ちまして立おがら物を食ふことが習慣
よあつて居りますが如何も見よくいことでもありませ
んか特又學校生徒でありますれを猶更のこと、思ひます
昔から言てありますすが自ら侮つて而して後、人之を侮る
とアして自分が見つともあいとを爲ますから人又侮られ
ることでありませう左すれを人又侮られまいと思ひますれ

を自分が自分を貴んで懸らなキヤなりません然る此生
徒と取も直さず自ら侮て居るのであります先づ其れと
擱きまして此間喰と申すものと習慣又あるものでありま
して畢竟食となくつても濟むものであります當今之往々
生徒貯蓄も行おこれますから之を縦ひ一錢でも學校へ預
けて貯蓄の稽古を致したら可うございませう特又數學も
學び學科の中よと經濟の意を含んで無いでもありません
から是非諸君の行されたいものと思ひます夫の有名の安
田善次郎氏と幼少から小厮又住込みまして漸と自分の店
を開くと塵積で山と爲るの四字を常又守つたと言ひます



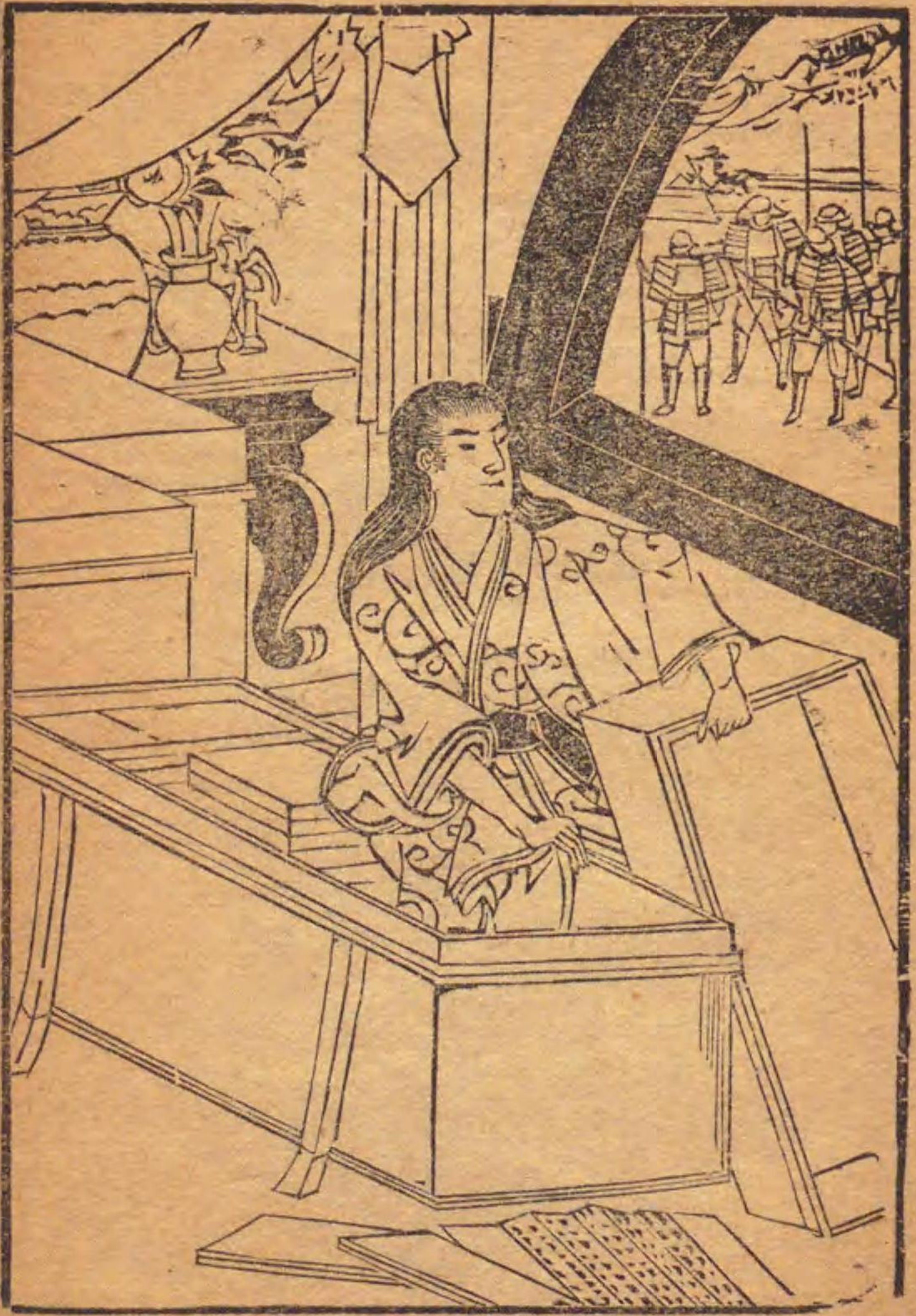
大塔宮護良親王乃話

今是れ又映りましたの之南都般若寺の堂内の体であります
 して三箇の櫃と經櫃で之へ這入て匿れやうとしられます
 のと護良親王であります天子の皇子でさへ此様又御苦勞
 みるんでありますから我々の苦勞と當然の事でありま
 す親王之父上後醍醐天皇へ御孝行で國の爲を思召す至て
 正しい御方で種々の御難儀も御遇なさいます實も勿体な
 い事であります是百尊氏といふ奸賊があるからであります
 す今其御成行を一通り搔摘んで御話しませう親子と後醍
 醐天皇の第三の御子でありますして天皇が等置へ御落なさ

る時、共御出おいでななつて笠置かさざきの陥おちちました時、圍とりを破やぶて遁にげ
 て奈良ならの般若寺はんにやじへ御匿おかくれなりました、スルと北條ほつじょうの軍ぐん
 兵へいと頻しきりと之これを搜さがしまして此般若寺こはんにやじを取圍とりかこました、所ところて生あ
 憎にく此日このひとして御側おそばが皆外みなそと出でしまして親王御しんわうおひごり一人ひとりで逆さかる
 遁のがれられなと思召おぼしめしたから已すでに死しなうとなさいましたか
 傍そばに經櫃きやうびつが三箇みつありましたが一箇ひとつもお經きやうが半分はんぶん這入はいりて一
 人位りぐらゐ這入はいりほゞ空あてありますから是こゝと都合つごうと思召おぼしめして御這入おはいり
 なりなまえて蓋ふたを少し斜にじらして置おきました、スルと臆おそて東とう
 兵へいが堂内だうないへ參まゐつて其蓋ふたの斜にじつた分ぶんと手てを着つけませんで至まく蓋ふた
 のした櫃びつを調しらべし所ところたが御出おいででゐいから其處そこら等みまはつて見廻みまわて

出でて行ゆきました、尤もつとも此時このとき親王しんわうと刃やいばを喉のどに擬あてて何時いつでも自
 害がいの出來できるやうにして御出おいでなさいました、所ところが斯さう幸さいはひと
 御注意ごちゆういが圖ず中あたつて視着みつかりませんかつたが親王しんわうの中々なかなか行
 届とどいた御方おめたでありますから今いま一度ど這入はいりた經櫃きやうびつを調しらべ來くるか
 も知しれないと思召おぼしめて、ゾツと蓋ふたのした經櫃きやうびつへ滲しみ入いり替かりよ
 成なつて尤もつとも前まへに這入はいりた經櫃きやうびつと其經卷きやうくわんの散ちむりを手早てはやに上下うへした
 又また入替いれかへ温あつたかみを覺させないうやうにして置おきました、扱さ其そのう
 斯かう至いたして仕舞しまなり東兵とうへいと案あんの如ごとく出でて來きて蓋ふたの斜にじつた經
 櫃びつを調しらべました、ケレどもお經きやうも亂みだれず這入はいりて在あり温あつたかみ
 も無ないから彌いよく御出おいでなからないと認みこめて斷念だんねんして出でて行ゆき

まして遂此難を御遁れごのちがひなりましたごん何と斯急せいな場合ばあひも能よ
 くも是れこまで御氣ごきの着つかれたものであります御發明ごはつめいでと
 ありませんか是れこから十津川とつがはへ御落ごおちりまして吉野よしのも
 義兵ぎへいを擧あげさせられて間まも無く東兵とうへいと御戦争ごせんそうもあつて斯
 る尊たふてと御身ごみを以もつて眉尖刀まぎさたを揮ふるつて二十騎にじゅうきを薙倒あぎたかし一先高まつかう
 野やへ御匿ごかくれなりましたして正成まさしげが千窟ちやくも勝鯨波かちぎみを揚あけるなり
 御布令ごふれいの檄げき又またを諸方しよほうも御廻ごまはしなりました赤松則村あかまつりむらや新にっ
 田義貞たよしさだの起おこつたのと全く親土まっけが起おこしたのであります左さ
 れを南都なんとの御危難ごきなんを御遁れごのちがひもあつたのとちうこう中興ちゆうかうの大關係たいくわんけいで
 あります人ひとと危急きゝんの時ときでも心得こころえが肝腎かんじんであります



實の登る話

是れ又映りましたと百合の花であります花よと蕊があり
まして上より下りましたのと雄蕊で下より上向きました
のと雌蕊であります動物と皆父母の體を異にしませんが植
物と事變りまして此花一輪が取も直さず實の兩親であり
ます此雌蕊がバラくと花を落しまして雌蕊が之を受
けまして、申さむ妊と申す様な勘定で實といふ子が出来
るのであります左すれを雌松だの雌松だのと申すのと、
ホンの形を見て名づけたもので決して夫婦なるもので
こありません夫の俣田繩と稻の花の交を助ける繩です

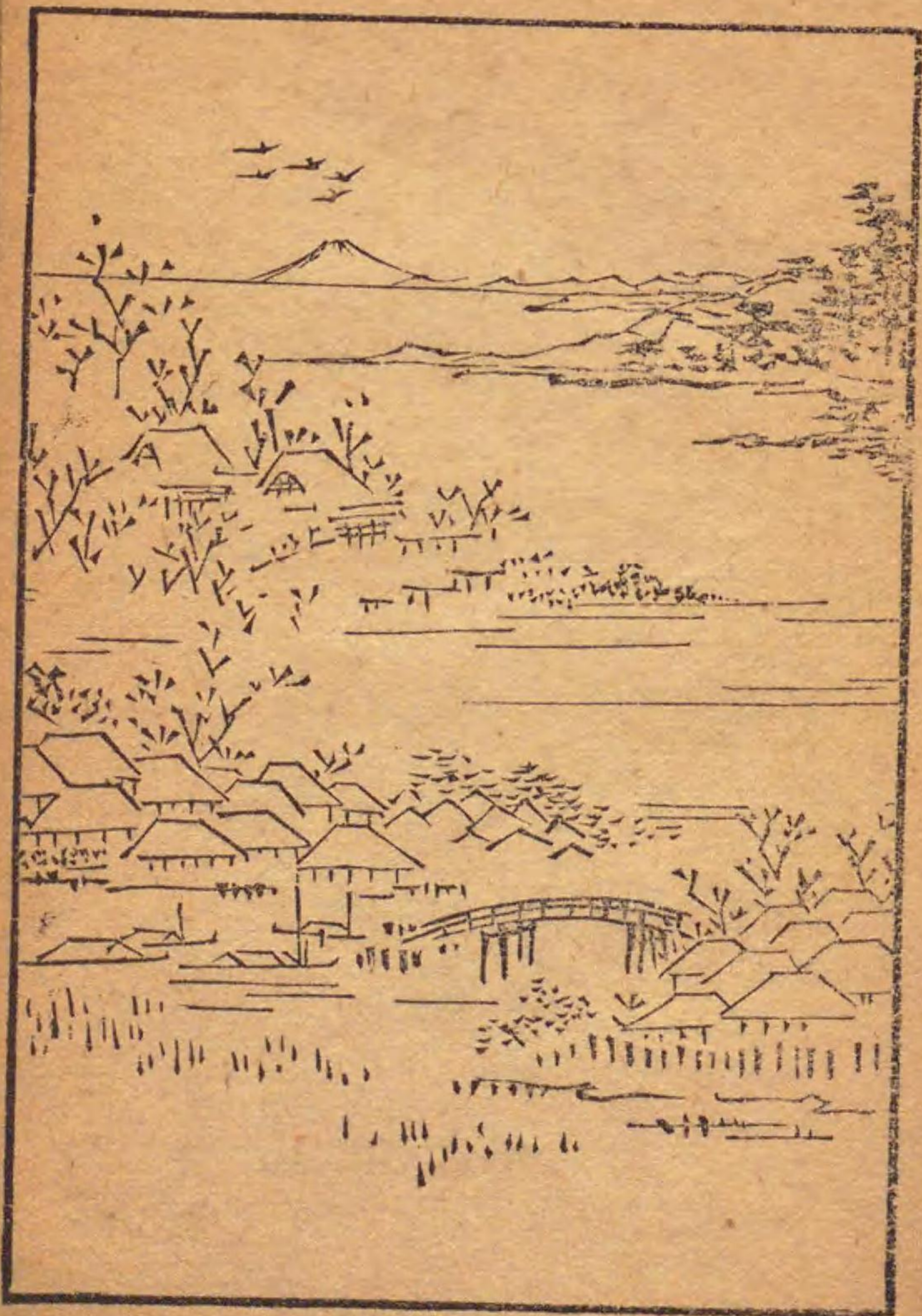


向島の話

諸君お目を留めて御覽なさい是れと東京向島の景色であります河の向ふの堤と有名の隅田堤でありまして華表の梢の僅も見ぬますのと三圍稻荷の社で春の彌生と中々の賑ひであります櫻の花と八重が多くて余程美事であります此堤と枕橋から千住の大橋近くまで續いて居まして凡そ一里もありませう又三圍は隣りまして牛の御前の神社があり長命寺本母寺、白髭神社等がありまして是れと名人の碑も幾等もあり又植半樓、魚十、柏屋などかありまして随分御馳走も食られます此堤の下は渡場があります

すが之を三圍の渡と申して竹屋の渡から渡るのであります是れより河向ふのお話をしますから一寸と繪板を換えます扱て映りましたのと橋場今戸でありまして左手の高みよりありますのと待乳山の聖天でありまして是れから向島を見渡しますと何うも佳い景色であります夫の夕暮といふ謠又月又風情を待乳山と申すのと此の事でありまして其右手の橋と今戸橋ではから右が今戸で今戸の右が橋場で御坐います此今戸橋の左手の渡場と竹屋の渡で此先の川岸を山谷渠と曰ます此よと軒を列べて船宿がありますとて餘程繁昌したさうですが今と錆れて一二軒ツキヤ有ま

せん此先きが日本堤、所謂土手八丁で此土手八丁之吉原
 があるので名高うございませが全く吉原の爲に築いたも
 のでとありませんで府下數十萬人の命の爲に築いたもの
 ださうです先年千住の大橋が落ちて其に當られて東橋が
 落ちて山谷が白海よなつた事がありましたがこの堤が有た
 故に市中が難を免れました全く洪水防ぎの爲ださうです
 何よしても此邊から向島へ繋けてと東京の名所で花をか
 りでとありません月よも雪よも佳い景色です夫の梅の春
 といふ清本の淨瑠璃よ皆盡く集めてあります今と汽車で
 便利ですから一度往つて御覧なさい地理の知識を開き升



神經の話

是へ映りましたの何で御坐いませう黒い坊さんが彼方を向いて體中が白いだけですが何と認められませう則ち是が神經を示したものでありまして白いのが神經であります神經の本と腦髓と申して頭の天邊にありませうソレで圖の頭は白くなつてあります其れから脊維と申して脊體が維が通つて居る脊髓神經といふのがあります此脊筋の白いのが左様であります其れから手足と出て居りまして指の端まで至つてませう是れだから何處を突ても痛いのであります扱て此神經は二様の活きが

ありまして一種の活きを運動神經と申し一種の活きを智覺神經と申します運動神經は肉の中を收めまして髓腦から指令をしまして體を動かさせるもので起居進退と是から起す知覺神經は眼耳鼻舌肌の五官を收めまして其末に何か觸りますと直ぐ之を腦髓へ告げて參つて知らせるもので視たり聴たり嗅たり味ふたり痛さ痒さ暑さ寒さを知らせるのであります此知覺神經を亦二種に分けまして一ツを普通感覺と申し一ツを特異感覺と申します痛い痒い腹が減つた喉が渴いたと申すのが普通知覺で視る聴く嗅ぐ味ふ觸るといふのが特異感覺であります此

視みるのを視し感かん、聽きくのを聽てい感かん、嗅かぐのを嗅きう感かん、味あじはふのを味み感かん、觸さるのを觸し感かんと名なけまして視し感かんの鋭すまどい者ものと支し那なの離り婁ろう、聽てい感かんの鋭すまどい者ものと厩うまやど戸の皇わう子して味み感かんの鋭すまどい者ものと柳やなぎ澤ざい柳りう里り卿きやうてあ
 ります離り婁ろうと實じつ又また蚕のの神しん經けいまて見み分わたまさうであります
 るし厩うまやど戸の皇わう子しと一じ時じ又また十じゅう人にんの訟うつたへを端はかれたさうでありま
 するし柳りう里り卿きやうと井いの水と瓶びんの水と河かの水を嘗あめわ分わたと
 ちします全ぜん体たい神しん經けいと勞らうするほど鋭ほい敏びん又またあるものがありま
 すが併ししらう勞らうし方かた又またよりまして腦かぶ病びやうとも精せい神しん病びやうともなりま
 すから時じ々は英えい氣きを養やしふとか又また之の精せい神しんを養やしふとか致いたして神しん
 經けいを休きう息そくさせんけれをありません



塙保巳一盲目にて學問したる話

是之塙檢校が源氏物語を講釋致して居る圖でございます
 聽者が聽きながら待合せて居る様子で一人が此處へ火を
 点えて參つたのであります檢校と目が見えませんから火
 が滅えても平氣なものです
 が聽者と書籍を見ながら聽て
 居るのよ火が滅いて見えないから其火を点す間 困つて
 待合したのであります時又檢校申しますよとサテく目
 の明た人はど不自由なものにありませんナ手前と目が見
 ぬません故又一向不自由とございませんと申たさうです
 是よと聽者も閉口しましたらう中々此盲人と大した者で

此位な事と申す等です素と此檢校と武州兒玉郡保巳野村
 の生れで農家の子でありますが幼時から眼が潰れまし
 た其れから十五の歳まで國に居ました
 が此歳に江戸に出早して兩富某の弟子となつて琴三味線、歌謠并に劍術
 を學つて居ました併し此様な事が嫌いで學問が好ですか
 ら府内を歩ひて書籍を求めて人よ讀ませてと誦讀をし人よ
 請ひさせてと其義理を知りました是から大層面白くなつ
 て萩原、川島、山岡おどの漢籍先生へ入門しまして兼て又
 貴山眞淵先生の門に入まして國學を勉強しまして最も律
 令又委しくなりました此時、年が廿四であつたと申すま

其後のち又また和學わがく講談所こうだんじよを設けまつまして大國學おほくにがくを盛もよしまして
 其そのから後のち又また群書類ぐんしゆいしゆ類るいといふ書籍ほんを著あらしました、所ところて
 此この書ほんが中々なかなか大部たいぶあらむので一千二百七十部せんにひゃくしちぶで台本がっほんよして六
 百七十卷ひゃくしちくわんよつたといひます何なんと盲目めくらであらつて此位このくらゐ著あら
 述たゆをしますと何なんうも大たいしたものでありませんか乃そので是
 ツばかりばかりであいのでいまだまだ續篇ぞくへんを千八百部せんはちひゃくぶ、著あらして前
 のと台あははせく三千七十部さんせんしちひゃくぶを著あらしました何なんと豪氣ごうきあら者ものでと
 ありませんか目めの明あた人ひとと何なんと思おもひますか其そのれで總檢校そうけんけう
 又また舉あげられまして日本國にっぽんこくの盲目めくらの頭かしらよありまして其和學そのわがく
 所じよと幕府ばくふから學田がくでんを賜たまはして昌平しやうへい校かう付屬ふぞくとなりました



花鳥日月

理化學の話

飛んだ狂書が出ました是とお三どんがツヒ何かよ拘けて
 芥子を用ふのを忘れて居て今出して嘗めて見ると薩張味
 が變つて辛く無くあつたから驚いて居る處であります一
 方又居りますの之學者兼官員といふ御方の後新造さんで
 流石に連添ふ方が方ですから其氣の抜ける講釋を搔摘ん
 でお饒舌をして居らつしやる体です、ダカラ女の兒でも
 孜孜と小學校へ上らなくちやありません御新造が言ます
 よと、さんヤ何を其様又驚くんだへ其れア何も不思議だ
 ないヨ理化學といふ學問があつて子何か盛て緊りと塞

をして置くと氣が抜けない是と空氣の這入らないやうよ
 拒ぐんだから理學の活さです扱て此空氣といふものの一
 寸と目又懸らないが餘程活物の混合つたもので窒素とい
 ふものが四分は酸素といふものが一分で成立てあります
 ケレども悪い空氣になると炭素や水素、アソモニアなど
 種々なものが混て居ます今芥子を其儘放置して置と空
 氣の中のものが芥子の中の辛い風味のある原素と抱合つ
 て氣の合とない物をかりを置いて行きます併し其事と聲も
 形もないから何うして連れて往つたか縦ひ傍よ見て居た
 ッて辨らぬい而して遺された物の色みが餘り變らぬいか



ら驚おどろくンだヨ何なんも驚おどろくことと無いから今いまお用つひなら横よこ
 町の八百屋ちやうやへ往いッて早はやく買かッて來くるが可いいヨと澄とまし込こんで
 遣やられたからナアール程ほどと解わッて是これから此頓馬とんまを爲しお
 いやうよと思おもッて十八番ばんの睡ひりを止よして頻しきりと理化學りくわくを
 勉強べんきやうしたと言います、マから何なんでも人やと遣やッそこなとあゝ
 ちやア理わけの解わけるやうよとなれないものです此このお三さんどんと
 自惜よしいと思おもたから遂とう學者がくしやよになりました、デスから何なんで
 も諸君みなさんと此學校このがくかうへ上あるのを達ようたし又出でかけるのを言付いひつけッ
 たやうよと思おもとすよ全体ぜんたい知らないといふのと現げんよ遣やり損そこお
 ヲ居ゐるンだと思おもッて孜せつせ々と御學おまがびなさる

智慧は工夫に在り

△是へ映りましたのと支那のズツと昔し三國ノ頃ノ人で
 あります此河端に立て差崗を致して居るのと魏の國の王
 曹操の子で曾植といふ者であります其傍に居ますものと
 魏の國朝廷の立派な官員達であります扱是と話をして居
 る所かと申しますると此時吳の國の王から大きな象を一
 頭贈しまして目方を計れと申しました何さま此吳の國と
 負けに劣らじと張合ツて居る敵國ですから魏の方よ此返
 答が出来あかつたら辱だといふので皆が此目方を計のよ
 心配しました、尤も此大象を量る權衡といふてとありま

せんのので一通の心配ぢやありません、所で此曾植が僅か
 七歳の兒童でありますが、早速船を浮べさせまして是へ
 象を搭せまして其船の水足の這入た處に記號を着まして
 扱其象を出中して其跡へ物を載せて記號の着た處まで水
 足が這入りました時、積荷を悉く權衡で量まして其一々の
 目方を總計して彌々大象の目方の幾何あると申しました
 其れで皆が感心をして驚いたの何のチヤありません乃で
 吳の國へも返答が出来まして辱も被、ず威勢も貶しませ
 んかつた諸君と第一算術の問題を解時、能く此事を思ッ
 て斯すれを斯うある筈だと理を推して考を盡すが可しい



能文なる少年の話

是へ映うつしましたの之これ儒士がくしやの邸やしきの門前もんぜんであります門前もんぜんも懸かけてあるのと投書とうしよ函うけで是これ文章ぶんしやうを投込なげこまする爲ためましたものであります扱さて此少年せうねんの年としが十二三じふにさんで文章ぶんしやうがそれとくじやう也じやう也であります此處こゝと長崎ながさきでありましたが此時このとき分ぶんは名高なだかい學者がくしやが死ありまして其墓かみは碑いを建てますと付つきまして大おほた儒士がくしや等らが碑文いぶんを作つくりました、ケレども之これは満足まんぞくしませんで何なにしる長崎ながさきと此頃このころ名人めいじんの輦あつまる處ところですから猶なほは世間せけんは廣ひろ告こして能よき上うへよりも能よい文章ぶんしやうを得えたいと思おもつて多おほくの文章ぶんしやうの投書とうしよを受うけました其れで今いま此少年せうねんが作つくつた文章ぶんしやうを竊ひそと投なげ

込こむ所ところでありませす扱さて投書とうしよの切きりの日ひとなりませしたから多うま
 くがくしやの儒者あつまが集りませして文章ぶんしやう開ひらきを致いたした所ところが無類むるい飛切とひきりと
 いふ文章ぶんしやうがありませした乃そこで之これを碑銘ひめいと爲なせんと極きまつて其その
 名なを見みると櫻痴あうちとありませした櫻痴居士あうちこじと後のちも東京とうきやうへ出でま
 して四等とうしゆつし出仕しゆしの大たいした官員くわんゐんとなつて遂とうとく日報社にっぽうしやの社長しやちやうと爲な
 った東京とうきやう日日新聞にっぴつしんぶんの主筆しゆひつで文章ぶんしやう上手じやうずの名なを世間せけんを響こかし
 ませした即すなはち福地源一郎ふくぢげんいちろう氏しでありませす、所ところで文章ぶんしやう巧たくみる者もの
 と御饒舌おしやべりも旨うまい、理窟りくつも立たちます、乃そこで東京府會議長とうきやうふくわいぎやうと爲なつ
 て本年衆議院議員ほんねんしゆぎのんぎゐんと爲なりませせんかツたが候補者こうほと爲なりませ
 ませした福地氏ふくぢも人ひとなり諸君しよくんも人ひとなり孜々せつせと御勉強ごべんきやうなさい



畫の話

前刻から段々學問上の話で少し片詰みましたから花やかな物をお目懸けします之と太夫の木偶で作人の左甚五郎であります此甚五郎が刻んだ猫が元日の朝鳴く杯といひますが眞逆其様を事とありますまい名人だから其位よやものでせう扱此人が斯まで譽られるのも元ことやせと畫から工夫したので總て工藝と畫が基だと西洋の賢い人もやすさうです乃で我邦でも工藝の學校で之畫を持第一の科と置きます此畫ほど重寶で智慧を開くもの之ありますん、だから一概に人形描く兒と頭搔くと言へません



高田屋嘉兵衛氏魯國乃少年よ

其國語を學ぶ

是へ外國の景を寫しましてお目を新しくしました之と東
 察加の官宅の景で此少年と魯國の氣の利た少年でありま
 す傍又語を習つて居るお爺さんと淡路國の船頭で此時生
 捕又爲つて此土地へ參つて居ますが今の世界と何うせ外
 國と交際しなければならぬ、カラして日本と魯西亞と
 軍をさせるやうな事と好まない何でも魯國の語を十分よ
 習つて仲を善させやうといふ考から此少年よ一心又魯語
 を習つて居る所で此字を知らない爺さんでさへ國の爲
 ん勉強しますから諸君と是非學んで置おさやありません

明治廿四年一月二日印刷
 全 年一月四日出版

著 者

篠 田 正 作

大阪市西成郡清堀村
番外百四十三番屋敷

發 行 者

中 村 芳 松

大阪市南區末吉橋四丁目
八十九番屋敷

印 刷 者

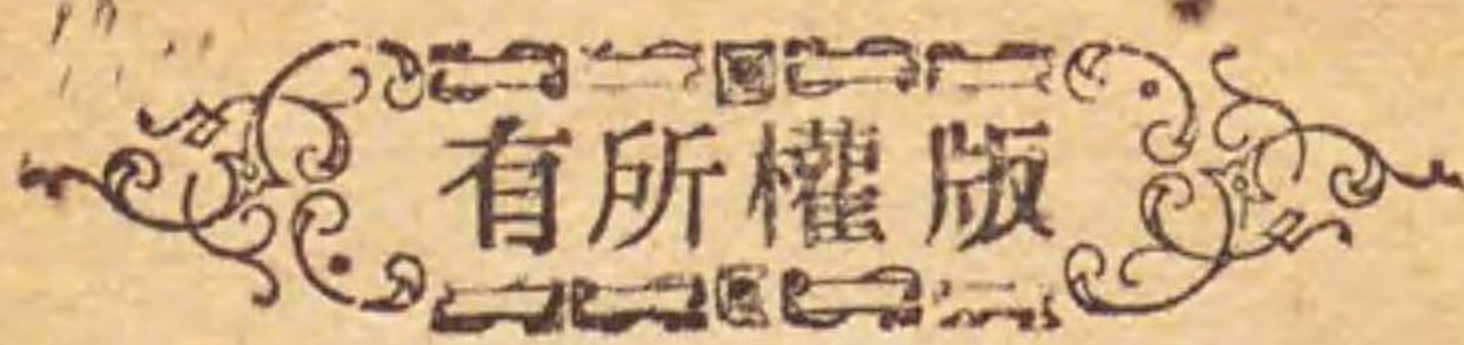
大 垣 彌 太 郎

大阪市東區高麗橋五丁目
四十五番屋敷

發 賣 所

競 争 屋

大阪市中心齋橋北詰一番地



●新篇
教育 脩身實話

初編全壹冊

●全

貳編全壹冊

●全

三編全壹冊

此書と小學生徒さんよと至極お爲
めよなる事をかりを記載ましたも
のですから各位一冊宛と是非購求
て閱讀下さ



特64-865



1200500962228

5